

特定非営利活動法人
京都海外協力協会

KOCA NEWS

2023年10月号

vol.6

目次

- 02 23年度1次隊表敬訪問
- 03-06 2023年度1次隊のみなさん、いってらっしゃい！ / 壮行会
- 07 SDGs学習会 / 協力隊ナビ
- 08-10 JICA海外協力隊 活動報告
- 11-12 連載 VIVA COLOMBIA
- 12 KOCA せいかグローバルネット 精華町との共催事業の紹介
- 13 連載 読書を通して、ヒーローになれる
- 14-15 連載 谷口英明さん×小説
- 16 行事予定のお知らせ

Temple in Wangdue Phodrang, photographed by Hajime Nabeta (2022-2, Bhutan, agriculture and forestry statistics)

2023年度1次隊 表敬訪問

2023年度1次隊 表敬訪問

宮津市	2023年7月4日（火）	13:30-14:00	(1名)
京都市	2023年7月6日（木）	10:00-10:30	(4名)
宇治市	2023年7月7日（金）	11:15-11:45	(1名)
京都府	2023年7月11日（火）	10:00-10:20	(9名)
京田辺市	2023年7月11日（火）	16:00-16:30	(1名)
城陽市	2023年7月14日（金）	10:00-10:30	(1名)
福知山市	2023年7月14日（金）	14:30-15:00	(1名)

<京都市表敬訪問：7月6日>

京都府からこれまで1,168名が隊員として派遣され、うち606名が京都市出身だそうです。表敬訪問の会場となった京都市役所「正庁の間」は、100年前に武田五一氏が監修したデザインを復元した場所で、明治時代の幕開けを令和の今も感じられる空間でした。4名の隊員が自己紹介や抱負を語り、門川市長から「コロナ禍の3年を経て感染症対策の大切さを感じています。頑張ってください。」「インドネシアで国体が開かれるバレーボール、活躍を願います」と温かいメッセージをいただいたり、海外から来賓を迎える時、その国で活動した協力隊経験者が京都市職員として対応しておりとても喜ばれていること、まさに「京都市の外交官」になっていることなどお話しいただきました。北山杉の良い香りが漂う和室で各隊員は記念品をいただき、終始和やかな雰囲気ですべての表敬訪問を終えました。



<京都府表敬訪問：7月11日>

9名の新隊員が西脇京都府知事を表敬訪問しました。「何より健康に過ごし、生活に慣れ、元気に戻ってきてください」と伝えられ、アンゴラ大統領が京都府庁を表敬訪問したときに「寿司が人気」と話題になったそうで、ナミビアでも寿司は人気なのかな、マダガスカルの主食は米だったね、など和食の話が盛り上がる場面がありました。京都府JICAボランティア応援団の皆さんから、「任地で京都のPRや、隊員の皆さんが日本の味を思い出せたら」と食材や文具の入った京都セットが届けられました。その後、盆路点前で抹茶のお点前があり、新隊員も抹茶を自服でいただいて、京都ならではの体験会がありました。



2023年度1次隊のみなさん、いってらっしゃい！

名前：中台 達也
派遣国：ベリーズ
職種：小学校教育



■応募したきっかけ

小学校教員になって10年以上がすぎ、ある程度、自信をもって参加できると感じたこと。現在、在籍している学校での勤務が3年になり、ひとつの区切りを迎えたこと。海外で働くという、10代のころからの憧れ。

■訓練所での思い出

単独行動の多い人間ですが、その分、週末に出かけた先で地域の人とたくさんかかわることができました。特に日帰り温泉にあったカフェのおばあちゃんとは、たくさんのお話をしました。訓練所では、語学に必死でした。

■派遣に向けての今の気持ちを一言どうぞ

たくさんの方に支えられていることが、この数か月で強く感じることができ、安心して赴任できます。うまくいかないことが山ほどあると思いますが、1つひとつがんばりたいと思います。

名前：横濱 拓哉
派遣国：ペルー
職種：青少年活動



■応募したきっかけ

総合格闘家の朝倉選手の試合を見た時に、自分も挑戦することの大切さを伝えたいと感化されたから

■訓練所での思い出

集合訓練は仕事柄慣れているので特に苦労はありませんでした。生活は快適だったけど、寝食を共にした仲間と離れるのは寂しい想いで男泣きしました

■派遣に向けての今の気持ちを一言どうぞ

ビビリなので不安でいっぱいですが、置かれた状況を楽しみたいです！

名前：野村 康代
派遣国：インドネシア
職種：バレーボール



■応募したきっかけ

若い頃から青年海外協力隊には興味があり、いつか自分も経験したいと思っていて、今年3月に定年を迎えたので、セカンドライフを謳歌しようと応募しました。

■訓練所での思い出

たくさん個性豊かで魅力的な人たちに出会って、いろいろと刺激を受けました。若い人たちと一緒に温泉へ行ったり、猪苗代湖で一泊したりしたのが忘れられない楽しい思い出となっています。

■派遣に向けての一言

インドネシアは出発が遅いので、まだ実感が湧かない状態ですが、良い時も悪い時もすべて、一瞬一瞬を楽しんで二年間を過ごしたいです。

名前：奥野 大輔
派遣国：ナミビア
職種：小学校教育



■応募したきっかけ

興味を持ったのは10年前。友人から聞いた話が面白そうだったからです。当時支援学校勤務だったので、小学校で活躍してから応募しようとしていたら、コロナもあって10年過ぎていました。良くも悪くも教員の仕事に慣れて来たので、もう一回り成長したかったというのが、応募の最後の決め手です。

■訓練所での思い出

居酒屋の大将が顔を覚えてくれたこと。多くの若者が筋トレをしていてビックリしたこと。班のメンバーが優しかったこと。語学が大変だったこと等色々ありました。

■派遣に向けての今の気持ちを一言どうぞ

苦労さえも楽しんで、失敗さえも思い出に出来るなら、もう派遣が決まった時点で成功だなと思ってます。でも、せっかくなんで、全力で頑張ります！

名前：兼田 瑞希
派遣国：ガーナ
職種：感染症エイズ対策



■応募したきっかけ

日本でホストファミリーをしたり、中学生の時ミクロネシアに行って現地の方と交流したことがきっかけで子どもの頃から海外で働きたいと思っていました。大学生の時、スリランカを訪れ、協力隊の隊員の方の活動を見学させていただいたことは協力隊に参加してみたいとより一層感じたきっかけだと思います。就職してからは保健所勤務だったので、コロナでとても忙しく余裕がなかったのですが、落ち着いてきたので今回応募しました。

■訓練所での思い出

優しい同期と生活を共にし、充実した毎日を過ごすことができました。特に印象深いのは音楽祭での合唱です。つたない伴奏でしたが、久しぶりに私なりにピアノの練習を一生懸命しましたし、皆さんの歌声も素敵で感動でした♡

■派遣に向けての今の気持ちを一言どうぞ

着任1週間になってしまいましたが、まだまだ慣れず、今はこの環境に慣れることに必死です笑

名前：桐村 聡子
派遣国：マダガスカル
職種：コミュニティ開発



■応募したきっかけ

以前から青年海外協力隊に興味があり、今回自分の中で参加する気持ちが固まったから。

■訓練所での思い出

語学を存分に学べた。社会人になってからこんなに語学と向き合う機会に恵まれたのは幸せだと思う。つらかったけど、みんなと愚痴りながら、励まし合いながら乗り越えられた。（でも退所後は拒絶反応が出て勉強しなかったのが、マダガスカル語は楽しみながら勉強します！）

■派遣に向けて一言

アフリカとアジアの文化が融合する魅力的な国、マダガスカル！
親しみやすいお米の文化や日本人に近い国民性と聞いているので、現地の皆さんと寝食を共にし、同じ目線に立って活動します！

名前：田村 友佳
派遣国：コスタリカ
職種：環境教育



■応募のきっかけ

かねてから国際協力に関わりたいという想いがあり、コロナ禍でやりたい事を見つめ直した際に、青年海外協力隊が思い描く環境に1番近いと思い応募しました。

■訓練所での思い出

訓練最後の2日間にわたって開催されたKTCフェスでのパフォーマンスが心に残っています。授業の合間や空き時間に集まって、ダンスやアカペラの練習をしました。語学勉強の息抜きになったと同時に、たくさんの人と何かを一緒に創りあげる過程が本当に楽しく、まさに大人の青春でした。

■派遣に向けて

環境先進国とも言われるコスタリカで環境に関わる活動ができることをとても楽しみにしています。コスタリカの豊かな自然にたくさん触れて、活動を豊かなものにしていけたらと思います。

名前：八木 萌子
派遣国：カンボジア
職種：小学校教育



■応募したきっかけ

コロナ禍で担任した子どもたち（5年生&6年生）がコロナで制限の多かった環境下で、様々な事に挑戦する姿や向上心に強く影響を受けました。私もこの子たちみたいに前向きな気持ちになれる事に挑戦したい！と思ったことがきっかけです。あと、人生における刺激が欲しかったです。

■訓練所での思い出

語学です！入所から退所まで、ずっとクメール語と戦う日々でした。カンボジアメンバー含めNTCの皆さまに沢山支えられて乗り越えることができました。出会えた仲間たちが私の大切な財産です。最終試験後、毎日のように飲み歩いたことや、休日に班のメンバーで猪苗代湖へグランピング旅行へ行ったことも楽しかったです！

■派遣に向けての今の気持ちを一言どうぞ

辛いことや苦しいことも沢山あると思いますが、最後に笑って終われたらオッキー！という気持ちで、ひとつひとつの出会いや経験を楽しみたいです。
たくさんの人との関わりの中で、自分の価値観の変化も楽しみです！

名前：賀数 さゆり（カカズ）
派遣国：モロッコ
職種：障害児・者支援



■応募したきっかけ

大学院生の時に、タイの大学附属小学校で日本の小学校と違う朝礼などの様子を参観し、他の地域の学校も見たいと思い、特に発展途上国での教育を知りたいと思いました。派遣確定の時に両親には、小学生の時から夢が叶ったねと言われたので、記憶にはありませんが、昔から何か惹かれるものがあったみたいです。タイミングが掴めず、応募できていなかったのですが、仕事も落ち着いてきて、コロナで一度応募がなくなり、応募再開した時に今しかないと思っ応募をしました。

■訓練所での思い出

一日中フランス語と向き合っって高校生の時よりも語学学習を必死にしたこと、週末には岳温泉へ行き癒され、時には同期とお酒を飲みストレス発散したこと、被災地訪問ツアーに参加して被災時の避難について考えさせられたこと、ISSが見えるときに同期数人と一緒に見て感動したこと、他にもたくさんの思い出があります。

■派遣に向けての今の気持ちを一言どうぞ！

任国へやってきて一週間で周りに何があるのか分からなかったり、言葉が伝わらなかったりということがありますが、同期隊員に助けてもらったり、任国の人の優しさに助けてもらったりして楽しく過ごせています。任地でも困ることがあるかもしれませんが、周りの人を頼って有意義な時間を過ごしたいなと思います。

壮行会

7月11日（火）京都ガーデンパレスにて、新隊員9名とOB4名の計13名が集まり、互いに自己紹介をし、海外旅行や音楽、読書、バイク、スポーツ、キャンプ、料理など色々な趣味を聞きながら、ランチをいただき、親睦を深めました。「今日は夜ご飯も一緒に食べます」と京都の同期仲間としてすっかり打ち解けていました。



SDGs学習会

より良い社会を作るために必要なことを学ぶSDGs学習会

7月9日（日）、「SDGs学習会：Learn about SDGs through games」を開きました。2030SDGs公認ファシリテーターの資格を持つラオス隊員OGのドイルえみさんが講師を務めた、隊員OBOGが持つスキルを活かした事業企画です。今回は、日本、ウガンダ、コートジボワール、タンザニア、ナイジェリアから集まった14名で、2人1組のペアを作ってSDGsゲームをしました。ゲーム前半、地球に暮らす私たちはどんどん「開発」しました。環境を破壊しながら、ビジネスを展開して、経済と環境、社会のバランスが崩れてしまいました。後半になると「お金は十分稼いだけれども、バランスを回復するには時間が足りない。どうしよう？」と一つのテーブルに集まり、お互いのカードを出し合って、社会・環境問題を解決する様は、さながら世界会議でした。SDGsゲームを通じて、首脳会議でなくとも、私たち一人ひとりが意見を持ち、互いを尊重し、奪い合いではなく分かち合いを進めたら、持続可能な社会を作ることができる実感する学習会になりました。（亀村）



協力隊ナビ

2023協力隊ナビ実施報告

4月2日（日）	13:30-14:30	新大宮広間（京都市北区）	4名参加
4月23日（日）	13:30-16:00	ゲストハウス京都イン（京都市下京区）	6名参加
5月26日（金）	19:00-21:00	デカイ穴（京都市北区）	11名参加
6月24日（土）	15:30-17:00	ゲストハウス京都イン（京都市下京区）	5名参加
7月9日（金）	11:30-14:00	堀川会議室（京都市上京区）	10名参加
8月6日（日）	15:30-17:00	ゲストハウス京都イン（京都市下京区）	1名参加
9月17日（日）	15:00-17:00	堀川出水団地317（京都市上京区）	2名参加
10月9日（月）	13:00-15:00	バンビオー番館（長岡京市）	3名参加
11月3日（金）	10:00-15:00	京都市国際交流会館（京都市左京区）	予定

協力隊ナビでは「資格は国家資格ではないといけませんか」「実際に行った話を聞きたいです」「英語をどの程度話さないといけませんか」「大卒でないのですが、協力隊に行けますか」「活動で得た気づき、自分が成長したと思う点はどこなところですか」などの質問や知りたいことを伝えていただきました。協力隊ナビへの参加のきっかけや、知りたいポイントは異なっても、他の人の意見を聞くことも協力隊を理解する上で役立つようで、全員で輪になって気軽に話すスタイルも良い感じでした。（亀村）



Profile

名前 山本 亜久里

隊次 2017-3次隊

派遣国 グアテマラ

職種 美容師

現在の職業 事務職、美容師



1 協力隊に応募した理由は何でしたか。

約20年勤務した美容室を退職。お客様の美と笑顔のため技術と接客の習得に努め、後輩の指導育成や採用活動などを経験し、店長、取締役と任せられる中、美容業界で働く人の地位向上というものを日々模索。会社に属する人間としてではなく、日本人・地球人として広く世の中に貢献出来るものはないかと考えたとき、協力隊の活動を通じて自分が今までお世話になった美容の職種があることを知りお役に立てるのではないかと思ったから。

2 現地での活動や日々の生活の様子を聞かせてください。

現地の職業訓練校にて現地のインストラクターと共にチームティーチングで美容科の指導を行いました。グアテマラには日本の美容師の国家試験を受験して免許を取得するような統一されたものではなく、各機関が独自に研修を受講した人やテストを合格した人にディプロマを発行するといったものになります。ですので当然美容師と名乗って仕事をしても技術レベルに差があります。

職業訓練校では1年を通じてある一定レベルの美容技術を習得するだけでなく、基礎学力の底上げを行う授業もあります。それ以外にも週末だけのクラスやネイルのクラスなど様々なコースが用意されておりました。私はその中で午前と午後の異なるクラスで、現地の美容技術の指導と日本の美容技術の紹介、デモンストレーションを行いました。また地域の美容室には巡回指導を行いました。現地では1年ほど美容技術を勉強して開業する美容師も多いので、今ある技術の見直しと更なる技術向上を目的により実践的な美容技術だけでなく、接客方法や新しいサービス、美容室経営についてや金額設定などを現場の美容師さんと一緒に考えたことが印象に残っています。



▲学校紹介で学校代表してのデモンストレーション

任国では仕事が少なく、ましてや女性が就ける職業となると更に少なくなります。そんななかで技術を身につけること=手に職は生きていくのに困らない、という概念は任国でもありました。しかし美容師の仕事はお客様と一生お付き合い出来る生涯パートナーという意味合いも持つ仕事であり、美を提供するだけでなくお客様に自信と笑顔、幸せをお届けする仕事であることを信念として接することは忘れませんでした。中南米での女性の美というのはヘアスタイルは画的ではない、ストレートのロング、パッチリメイク、ヒールに短いスカートといった、女性らしさが重要視されるので、中南米の文化を勉強して自分落とし込むことも必要でした。

私の任地での生活ですが、標高が2,400mほどありました。山の天候とおなじようなもので濃霧で前が見えないこと、乾きつつあった洗濯物がまた湿気る前に取り込む、の闘いでもありました。雨季になると午後から必ず雨が降り、乾季になると雨が全く降らないといった具合です。電車が代わりに乗り合いタクシーや循環しているワンボックスカーの交通の便が良く標高が高いので坂だらけなのですが乗り慣れると、自分から行き先を運転手に聞くものだということがわかりました。デコトラのようなバスに乗って中米一の高さのタフムルコを登山したりグアテマラの国鳥ケツァールを観に行くことも出来ました。地震の多い国ですので、水着を着て温泉のような施設を訪れたり、娯楽は少ないですが自然の恵みを感じるのんびりとした毎日の生活を送っていました。日本と真逆の子どもが多い国なので子どもに対してすごく寛大で、満員のバスで親も子も立たなければならないときは座っている乗客が子どもを抱っこして座り、親が降りるときに手渡しするなど皆で子どもを見守っている。育てている感がありました。

3 活動や生活のなかで

・戸惑ったり、困ったりしたことはどんなことでしたか？

時間の概念問題です。誕生日会のような楽しいことが待っていても始まる時間は約2時間後。その時間の遅れ具合がわからず、(現地の方は皆同じ時間ぐらいに遅れてくるので始まる時間はみんながだいたいそろった時間)いつも2時間以上待たされました。配属先の活動はきっちりしているので時間通りに始まるためその差にいつも戸惑いました。

もう一つの困ったことと言えば、グアテマラ人は家族皆が仲良く暮らしていて何世帯も一緒に住むような大家族が基本です。愛情表現が豊かで慈しみ深いので、日本から来たひとりて来た私を不憫に思うのか会う人会う人にいろんな食べ物をごちそうしてもらって最初のうちは断ると気を悪くされるかもしれないということで断らずにいたら、ただでさえ朝と昼の間に間食の時間、昼と晩ご飯の間に間食の時間があり、一日5食なのになんかところでご飯を食べ過ぎてしまいどんどん太っていきました。

・失敗や苦労はどんなことがありましたか？

生活していくうえでの苦労ですが、必ず毎日夕方から次の朝まで断水する問題とダニ問題です。ダニは派遣前訓練でも覚悟しているんな準備をしていきましたが、何ひとつ効きませんでした。現地の人にも刺されているので仕方がないとは思いましたが、ひどく刺されると熱が出たり体調が悪くなるので病院にも何度もお世話になりました。最終、もう抵抗しても無駄だと思ったので、派遣されている間はダニに喰わせておくことにしました。

水が出ない問題は、夕方から出ないので簡単な食事にならざるをえず、かと言って水がでたとしても水道水は飲めないの水をタンクで購入していました。就寝前の歯磨きもその購入した貴重な水を使い、朝になると水は出ますが、シャワーを浴びようとしてもチョロチョロのぬるいお湯で洗濯機もなく手で洗いで絞って、ロープに巻き付けて干す、といった現地の独特の干し方で洗濯をしていました。水を出来るだけ使わず、また衣類も洗いやすく乾きやすい素材のものを選ぶなど生活の知恵が身に付きました。



▲調理師コースの皆さんと記念撮影

・楽しかったこと、やりがいを感じたことはどのような事でしたか？

配属先での生徒やインストラクターとの関係性です。周りがすごく私を気遣ってくれたことでことばも最初は上手く話せませんでしたが、ことばが上手く話せなくてもコミュニケーションを取ることの重要性を教えてもらいました。生徒も皆面倒見が良いので私のことを後輩のように慕ってくれました。年齢やキャリア関係なく対等に相手との関係性が構築されていきました。ことばももっと上達したいと思えましたし、何よりも私を活かそうと周りの方々が協力してくれました。付加価値としてのマッサージだけでなく頭皮ケアや将来の髪のために重きを置いてはどうかと提案してみたところ、ヘッドマッサージの理論と技術習得するための時間を設けてもらい、その後それが評判になりカットやカラーなどの施術ではなく、マッサージ施術をうけにくる人が続出したのがやりがいを感じた出来事でした。

4 活動を通して得られたこと、あなたが変わったなと思うことはどのようなことですか？ 例えば 能力面（語学、専門性）、資質・性格面、価値観・考え方、人間関係、その他（感動、夢）

ボランティア精神と言っているうちはまだ意識してしまっているのだと思いますが、人のために損得勘定無しですぐに動けるようになったことだと思います。派遣中にグアテマラの火山が噴火するということがありました。TVやラジオ、市役所、私の配属先でもトルティーヤの粉、砂糖、米、油、水、等の寄付を呼びかける行動や街の中央広場でも衣類の寄付や募金の為に地域住民がすぐ動いていたのを見ていつものんびりしている国民性でも、困っている人のためにすぐ行動する行動力と愛情に感動しました。

またあるとき配属先で職員の一人が交通事故に遭いました。生徒がお金を出し合うだけでなく、飴や駄菓子を買ってそれを他の生徒に売ってそれをお見舞い金の足しにするという発想です。自分たちが決して潤っているわけではありませんが、人のためにお金を出し行動も出来る思いやりを心動かされました。日本に帰国後はゆとりのある生活を心がけ、人のために率先して動ける自分でありたいと念頭において生活しています。

5 協力隊の経験を今後の人生にどのように生かしたいですか？（仕事、趣味、地域での活動など）

将来的には日本にかぎらず国際協力の仕事に就きたいと考えています。夫が外国人ということもあり、外国人が日本で生活していくことの生きにくさ、難しさのようなものを身近に感じております。協力隊で異国の地で生活した経験のある私にとっても共感出来る部分が沢山あります。日本も観光だけでなく多くの外国人を受け入れようとしているなかで何か私に出来ることがあるのではないかと感じております。

現在の私の仕事は介護施設を利用されている利用者様の美のお手伝いとして訪問美容と介護事業所で働く皆様のサポートとして労務関係の事務仕事に携わっておりますが、スピード感のある日本では日々のやるべきことに忙殺されて周りへの感謝や思いやりの愛情表現を忘れてしまいそうになっています。それを忘れないためにも日常生活の地域でのボランティア活動への参加や自分が活かされていることに対する謙虚な気持ちを忘れず、地域社会と日本社会、国際社会に属する人間として皆さまのお役にたてる自分でありたいと願ってやみません。



▲日本文化紹介で
現地の方に浴衣着付

VIVA COLOMBIA

今号では、通訳の仕事についてお話しをさせていただければと思います。
前号で"語学について"書かせていただきましたが、語学を習得し仕事として活用していくためにどのように言葉を扱うべきかお話ししていきたいと思います。

今、私は通訳としてスペイン語と日本語を使って仕事をしていますが、通訳は人と人を繋ぐ役割です。

私は主にラテンアメリカの国の人たちを相手に通訳をしますが、歴史や文化が違う中で、言葉の伝え方には注意をしながら訳します。

言葉を正確に訳すということは大前提として必要な技術の一つです。
ただ、必ずしもそれが正解かは、状況によっては正解ではないこともあります。

私が所属しているのは、プロ野球チームという特殊な環境でもあるため、選手にとって結果が全てです。

結果が全ての中で、どのようにして担当の選手がまず、良い環境で野球をするのか。
というところに焦点を置いていきます。

そこで、私が青年海外協力隊の時に行ったコロンビア共和国での経験が活かされます。
まず、私自身がコロンビア共和国に到着して何に困ったのか。

言葉や、生活面、人とのコミュニケーション方法など、私が現地に行って対応が難しかったことを思い出します。

なぜなら、環境を整えることが生活していく上で、そしてプロスポーツ選手として活躍していく上で一番と考えているからです。

彼らが困りそうなことを事前にピックアップし、すぐになにかあったら対応できる準備をします。

外国人選手は1人で来日するケースは少なく、家族と共に日本へ来ます。

小さなお子さんも連れてくる人が多いので、病院に帯同するケースも少なくありません。

小児科ならこの病院、内科ならここ。と事前いくつかの候補をあげておきます。

時間や曜日によって行けない場合もあるので、その際は、また新たに探します。

このように、私は言葉と言葉を繋ぐ通訳という仕事はもちろんのこと、事前準備をしっかり行い円滑に物事がスムーズに進むように何を優先すべきかを考えて動くことを意識して仕事をしています。

そして、プロの野球選手の通訳ということで、いかにモチベーション高く野球に取り組んでもらうのかを意識して仕事にあたります。

野球で結果を出してもらうために、彼らの家族を含めたサポートはもちろん、彼らの意見を尊重しお手伝いをするが多々あります。
その中で、時間を管理したり、スケジュールを管理したり、マネージャー的な要素も少なくありません。

野球で結果を出ないと彼の気持ちも落ち込んでくるので、愚痴を聞くこともあれば、一緒に食事にでかけて、気分を晴らしてもらう役目も担います。

そう、私は通訳であり、マネージャーであり、最も近くにいる親友なのです。

結果が出れば共に喜び、結果が出なければ共に悔しがり、結果が出るためには何をしないといけないのかを考える。

そうして、時間をかけて彼らとの信頼関係を作っていきます。

言葉と言葉を繋ぐ架け橋になるのはもちろん、一番近くにいるサポーターという役目も兼ねています。

次号では、私の仕事内容についてお話しさせていただければ嬉しいです。



KOCA せいかグローバルネット 精華町との共催事業の紹介

国際理解講座「地球っこ講座」

～非識字体験のワークショップ「ここは何色？」～

日時：2023年10月29日（日）13:30-15:30

場所：精華町役場交流ホール

定員：先着40人 小学4年生以下は保護者同伴

参加費：無料



内容：一見すると、きごうや模様にはしか見えない12カ国の言語で書かれた色を調べて、絵を完成されるワークショップです。文字が読めないことを体験することで、外国で暮らす苦労や大変さに気づき、日本語の文字が読めない人たちのために、どのような工夫がで切るかを考えていきます。



読書を通して、ヒーローになれる。

エピソード4

拍手と妄想

益井博史さんによる連載企画「読書を通して、ヒーローになれる。」第4回をお届けします。益井さんがビブリオバトルに出会ってから現在に至るまでの活動、ビブリオバトルってどんなことをするのか？その魅力とは？など、様々な視点からお伝えしていきます。今回は、初めてのビブリオバトルでチャンプ本を獲得した益井さんのお話。数日後、一通の電話がかかってきますが…？

【自己紹介】

益井 博史 (Masui Hirofumi)

- 青年海外協力隊2015 (H27) 年度3次隊 / 青少年活動 / ソロモン
- 立命館大学情報理工学部創発システム研究室 客員研究員
- 一般社団法人ビブリオバトル協会 職員
- ビブリオバトル普及委員会 理事
- 大学卒業後、まちづくり会社を経て青年海外協力隊に。帰国後、ビブリオバトル考案者の研究室で論文執筆や大会運営に携わる。
- 著書『ソロモン諸島でビブリオバトル』（子どもの未来社）
- 最近の趣味：サウナめぐり、ボードゲーム



(前回までのあらすじ)

留年3年目にして、ほぼ他人と会話しない生活を送っていた筆者。初めて挑んだ大学図書館でのビブリオバトルで、見事チャンプ本を獲得したがー？

チャンプ本として僕の紹介した本のタイトルが読み上げられた瞬間、毛が逆立つような感覚がした。気づくと他のバトルーさんや聞き手の方々が、拍手を送ってくれている。

拍手？僕に？留年を繰り返して、自宅と大学図書館とを行き来するだけの生活をしていて、本を執筆したわけでもなく、ただ自分が読者として楽しんだ本について語っただけの僕に…？

ふわふわした頭で、コメントを求められた。

「嬉しいです。ありがとうございます」

それ以上喋ると、図書館でむせび泣く留年3年生になりそうだったのでやめた。



その数日後、大学図書館の職員さんから電話がかかってきた。

「全国大会の話なんですけど…」

あのときのビブリオバトルは、大学生全国大会の予選を兼ねている、とアナウンスされていたのだ。

詳しくは大会運営本部に確認して連絡する、と言われていたので、僕は「全国大会」なるものを妄想しながら待っていた。

「実は、運営本部から予選として認められないと言われてしまいました…」

どうやら、学生だけでなく図書館職員さんもバトルーになっていたのが問題視されたいらしい。

「あ、そうなんですか。全然大丈夫です」



職員さんはたじろぐほどの平謝りで、こちらが申し訳ないくらいだ。僕はもともとビブリオバトルというゲームが気になって参加しただけで、全国大会のことなんて考えてもいなかった。

初めてのビブリオバトルでチャンプ本を獲得できただけで充分報われたし、第一いい加減就職活動に力を入れないと、将来が危うい。

電話を切った後、夕飯を食べ、シャワーを浴び、布団に潜り込んで、僕は思った。

「自分で予選会を開こう」 (次回に続く)

今回の一冊：『太陽の塔』（森見登美彦 著／新潮社）

妄想というものは、ときに人を無茶な行動に駆り立てます。本作は、ある自意識過剰で妄想過多な男子大学生と癖の強い友人たちによる青春（？）ストーリー。舞台は京都で主人公はなんと留年生ということで、読んだ当時笑うに笑えなかった思い出。

谷口英明さん × 小説 日々の生活の中で、京都を深掘りする ～「DIG into KYOTO」～

連載
企画

今回は、谷口さんの小説の第2作品「リバーサイド物語」について、インタビューしていきます！

○「リバーサイド物語」のあらすじを教えてください。

高木瑞菜は香川県から京都にやってきて、この4月から大学で学んでいる。実家を離れて一人暮らしという京都での新しい生活がはじまったばかりの瑞菜だが、まだ友人は誰もいない。午後の大学の講義まで少し時間があるため、講義前に昼食を外で食べることにした。

スマートフォンで近くのカフェを検索すると「リバーサイドカフェ」という店が出てきた。

グーグルマップで店の場所を確認して、そのカフェを訪れる。

店内には長いカウンターがあり、そこには男子学生が座って食事をしながら、店主と話をしていた。男子学生の後ろを歩いて瑞菜はカウンターの一番奥の席に座り食事を注文した。

食事がくるまで瑞菜は店内の様子をじっと見ていたが、その後男子学生は店を出ていった。

その店の昼食を食べた瞬間、その味が実家を思い出させ、瑞菜はほっとするのだった。

店内のお客さんが瑞菜一人になった時、瑞菜は思いきって店主に話しかける。

店主と話をしている中で店主が愛媛県から京都に来たと聞いて、同じ四国出身ということで瑞菜は店主に親近感を覚える。

ある日、瑞菜はSNSで「旧三井家下鴨別邸」の庭に桔梗が咲いていることを知り、下鴨別邸を訪れる。庭に桔梗が咲いているのを見つけた瑞菜は、先日カフェにいた男子学生（吉田浩史）から声をかけられる。浩史は建物のスケッチをするために下鴨別邸を訪れていた。

瑞菜が浩史に先日カフェで浩史と店主が“ヒュッゲ”の話をしていたことを話すと浩史は瑞菜にそれについて書いた本に興味があるならその本を貸しますよと告げた。

後日、瑞菜と浩史は賀茂大橋で待ち合わせをして、鴨川デルタの河川敷に降りて、そこで本の受け渡しをする。二人は鴨川の流れを間近に見ながら、お互いの故郷のこと、京都で学んでいる理由、今の大学生活についてそして将来のことなどを語り合うのだった。

○ストーリー誕生秘話を教えてください。

小説の舞台となった「リバーサイドカフェ」は一日3交代制のタイムシェアカフェです。実際、第2作品の小説で取り上げたのは、火曜日の昼枠の「おばちゃんのおうちごはん」です。初めて火曜日のカフェを訪れたのは2021年5月のコロナ禍の時でお客さんは私一人しかいませんでした。その時、店主からカフェ周辺の出来事やそれぞれのお客さんとカフェのつながりについての話をお聞きしました。その時、お聞きした話をもとにして小説をつくりました。

○書き上げまでにどのくらい期間がかかりましたか。

6か月です。

○作品を書く中での思い出を教えてください。

KOCAが2021年3月に発行したJICA海外協力隊活動報告集「TOGETHER」の作成に一部関わらせていただきました。その時に、ブータンに赴任された協力隊OGの方取材しました。帰国後、ブータン出身のご主人とともに「ブータン食堂」を開店したのが、「リバーサイドカフェ」でした。そのことがご縁で、このカフェを訪ね、通うようになりました。

○作品の中でこだわりの部分を教えてください。

鴨川デルタの風景と登場人物の心の情景をうまく描きたかったです。例えば、デルタの河川敷に下りた時に感じる「ひんやり感」、開放的な空間にいるという心地よさ、そして鴨川のたゆまない力強い水の流れを目の前にして感じる感覚などです。

○この作品をどのような人に読んでもらいたいですか。

京都の大学で勉強するために地方から京都にやってきた大学生やそのような経験をお持ちのOBOGの方々に読んでもらいたいと思います。

○「リバーサイド物語」を執筆する中で一番苦戦した、大変だったことは何ですか。

大変だったことはなかったです。「リバーサイドカフェ」に何回も通うことで、自然に小説が生まれたと思います。

○最後に、皆さんに向けて作品の魅力PRをどうぞ！

カフェを舞台にして、地方から京都の大学にやってきた若者たちの地方（＝ふるさと）に対する想いと京都での新しい生活への希望やとまどい、不安のようなものを描きました。

コロナ禍という未曾有の時代に、新しい出会い、つながりによってこれから成長し、活躍してゆく若者たちに、この作品でエールを送りたいと思います。

<https://note.com/2021digintokyo/n/nbb37f633cee5>



